

話題提供者：黄均鈞さん（華中科技大学）

実践者は学習者、現場とどのように向き合うか

—中国の日本語教育の現場における活動型授業の光と影—

5月22日(月)18:00~20:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 22号館 601教室

参加費：無料

予約：不要(会場に直接お越しください)

お問い合わせ：monthly@alce.jp(月例会委員会事務局)



この場を借りて、昨年、私が遭遇した、中国の大学における日本語授業に関する「四面楚歌の経験」をシェアしていきたいと思います。

私は2016年の6月から、中国の大学で日本語教師として働き始めました。担当科目は中国の大学の日本語専攻における主幹科目—「総合日本語」(精読)です。しかし、授業の引継ぎの日に、ベテラン教師が期待していた「総合日本語」授業の在り方と、私の考えている「総合日本語」とはあまりにも異なることが分かりました。また、授業開始1ヶ月後のある日、私のところに「黄先生へ—総合日本語授業についての調査」という学生代表からの授業内容に対する抗議メールが届きました(筆者が担当した総合日本語授業に関しては、黄(2017)を参照)。

実践者と学習者の教育・学習観の違い、周りの同僚たち(教師コミュニティ)による私の授業内容に対する賛否両論、そして大学側の学生による教師評価制度等。こうした背景の下で、私は悩みました。

「自分の教育理念に基づいた授業を続けていくか、学生の意見を取り入れ、彼らの期待に沿った授業をするか、それとも折衷案で行くか。」本特別企画では、まず、こうした「私」と学習者の葛藤、及び両者の変容とその要因に関し、お話しします。

その上で、以下の点について、参加者の皆様と考えます。

- 教室において、実践者の教育・学習観と学習者の教育・学習観が異なる場合、実践者はどのように学習者と向き合うか。

参考文献

黄均鈞(2017). 教師が「教えない」総合日本語授業における実践者と学習者の葛藤と変容『第二回「日本語教育学の理論と実践をつなぐ」国際シンポジウム(第二届“理论与实践结合的日语教育学”国际研讨会)予稿集』, 32-37

http://www.jpfbj.cn/language/download/huiyishouce-ALL_2017.pdf